

# 段階論の再構成\*

— プレート交替論 試論 —

小幡 道昭

2018年8月9日

## 目次

1	中心国移動説批判	2
2	「金融資本」支配説批判	9
3	「商人資本」支配説批判	14

## はじめに

今回は、現代の資本主義を捉えるうえで、資本主義の歴史的発展はどのように再構成したらよいか、考えてみたいと思います。この問題は、原理論研究の立場からいくどか論じたことがあるのですが、あらためて基本の基本に戻ってみなおしてみることになります。

はじめに、段階論という「枠組み」あるいは「領域設定」と、その「中味」をはっきり区別すべきだという点について断っておきます。資本主義の歴史的発展は、宇野弘蔵によって「段階論」として、『資本論』を基礎とする「原理論」から分離され、独自の研究領域として確立された経緯があります。宇野弘蔵の方法論の最大の意義はこの分離にあります。20世紀のマルクス経済学は、とうぜん資本主義の歴史的転換を強く意識して、金融資本論、独占資本論、帝国主義論など、旺盛な研究を進めてきたのですが、それらを『資本論』の延長線上に位置づけようとする指向を具えていました。段階論の分離は、『資本論』の読み方に決定的な影響を及ぼし — 形式的な方法論そのものより、原理論の内容のほうがインパクトがあったと私の目には映るのですが — 伝統的なマルクス経済学からの決別につながりました。これが、「枠組み」としての段階論の問題です。

これから検討するのは、主として、資本主義の歴史的発展を、重商主義段階、自由主義段階、帝国主義段階の三段階にわけ、それぞれ資本主義の生成、発展、没落 — 爛熟といっても同じです — で構成する、という「中味」の問題です。もちろん、段階論に対して原

---

\* SGCIME 夏合宿 2018.8.9

理論をどう再構築するのか、といった枠組み関わる問題を含むことにはなりますが、あくまで段階論の再構成が目的です。

ただ、このように生成、発展、没落という段階構成を見なおす、というと、宇野の方法論を支持する人のなかから必ず、「では、第四段階を新たに設けるのか」という質問ができます。「前の三つの段階に区切ることを不変の前提にするから、次の段階はなにか、という発想になるので、私は、三つの段階に区切ることを自分を見なおす必要があるとっているのです」と応じると、「そういう議論はかつて聞いたことがあるが — 「世界資本主義」のことを仄めかしているのですが — けっきょくそれは、段階論を原理論に解消する結果になるのだ」という批難をうけることになります。

原理論から段階論という領域を分離するという方法論的「枠組み」と、生成・発展・没落という、その一つの構成方式である「中味」との区別が、どうしてもつかないようです。原理論、段階論、現状分析 — 三番目は有名無実です、私は原理論と段階論の区別がポイントで、これと実証研究である現状分析との関係が問われるのであり、三つを並置するのではなく、((原理論・段階論)・現状分析)と構造化すべきだと思いますが — という「三段階論」における段階論と、生成・発展・没落の「三段階説」の区別がつかないところに、宇野の支持者たちのドグマがあるのです。とりわけ原理論が密に構築されているのに比して、段階論の内容が粗なために、逆に「段階論」は堅いから覆われ批判的検討を受けにくいものになっているように見えます。この殻の中身を見なおすことがここでの目的で、繰り返しますが「段階論」を「原理論」に解消する段階論不要説を主張するものではありません。

今回は、だいたい次のような流れで、中身の話をしてゆきます。まず、なぜ、段階論の再構成が必要なのか、その理由を述べてみます。これはすでに繰り返し書き記したことであり、また「宇野理論」を知るひとには周知のことも多いので、グローバリズムをめぐる中心国史観との違いを中心にポイントのみ摘記しておきます。次に、宇野の「段階」を棄却し、多重起源説、プレート交替論といった、あらたなアプローチに置き換える必要性について論じてみます。これもすでにこの研究会で何度も話したことですが、それぞれの段階には「支配的な資本」が存在するという三段階説の公式について、原理論研究の立場から批判を加えてみます。最後に、新たなプレートの台頭をどう捉えたらよいか、考えてみます。「段階論」を支えてきた「基軸産業」という概念の再検討になりますが、できるだけ実質に踏みこんだ — たとえば、情報通信技術の発展を捉えることのできる、原理論再構築の可能性といった — 話をしてみます。

## 1 中心国移動説批判

■後発資本主義の誕生 はじめに結論から申し上げます。なぜ、再構成が必要なのか、それは、宇野の三段階の構成では、新たな資本主義の勃興が捉えられないからだ、というのが結論です。

短かすぎてわからないと思いますので、最低限の敷衍をしておきます。発端は、グロー

バリズムの問題であり、直接の帰結は、ドイツの資本主義的發展を資本主義の不純化を示すと捉えた帝国主義の段階規定の限界であり、それは、資本主義の起源はイギリスにあると捉えた、重商主義・自由主義段階における資本主義の単一起源説の見直しに帰着します。逆向きにみれば、『資本論』に描かれた「いわゆる資本の本源的蓄積」を資本主義の起源として位置づけたことが、後発資本主義における資本主義の「生成」を「重商主義段階」として位置づけることを困難にし、20世紀末における新興資本主義諸国の擡頭を死角に追いやったということになります。

■理論の歴史性 このことは、宇野の段階論が単純に誤りだということとは違います。経済学の理論は、特定の歴史的環境のなかで形成され、その時代に特有の意義をもつものです。このことを明確に意識し、経済学に固有のイデオロギー性を、ある意味で基本テーマにしたのが『資本論』です。古典派経済学を俗流経済学から区別し、価値論をベースに純生産物の分配の原理を客観的に分析した意義を評価すると同時に、この社会を人間の本性にかなうものとして普遍化した究極の社会像とみなすイデオロギーを明らかにすることに腐心したことはよく知られています。

しかし、この『資本論』もまた時代の制約を超えることはできなかつたと、正面からこう批判したのは宇野弘蔵です。『資本論』にみられる、発展＝収斂説、内部＝自己崩壊論型の資本像は、自由主義段階のイギリス資本主義の歴史的特殊性によるものであり、これを一般化したのは社会主義のイデオロギーのなせるところだとしたのです。これに対して宇野は、マルクスの時代にはこの原理蔵はそれなりの歴史的必然性があり、また帝国主義段階の發展を知り得なかつたマルクスにはこえがたい限界だったといっています。そして、この論理で、だが、帝国主義の現実を知り得る「われわれ」には、『資本論』の原理を今一度見なおし、たとえば窮乏化法則のように、理論的に説明することのできない要因を除去し、『資本論』に内包された純粋な資本主義像を構築しなおし、これをふまえて、帝国主義段階を自由主義段階から区別する資本主義の純化傾向の逆転を捉える、理論的な基礎を与えることができるとしたのです。マルクスの唯物史観をもって、唯物史観を再帰的に批判したレトリックは、もうこれ以上解説するには及ばないでしょう。

■批判の再帰性 問題は、その先です。ふりかえればだれもが気づくように、これは宇野にも再帰的に及んでしかるべきことです。宇野が知り得なかつたグローバリズムの現実に直面したとき、私は宇野の段階論に対して自然に、宇野がマルクスに対してとった態度を、宇野に対してとるようになりました。これは気がついたらそうなっていたので、それだけ、マルクスや宇野のイデオロギー批判論が私にしみこんでいたということでしょう。

もちろん、現実がマルクスの時代とも、宇野の時代とも違う、というのは論理的にでてくる結論ではありません。あくまで、歴史的な現実に対する、経験に基づく事実認識です。人によって異なるでしょうし、私の認識が間違っていることもあるでしょう。ただ、グローバリズムという言葉は私がつくりだしたものではありません。私は、はじめむしろこの種のバズワードをすぐ飛びつく人たちに抵抗感があり、10年間くらいはこの用語を使うのをためらっていました。ただまわりのマルクス経済学者が、従来なら「帝国主

義的」というべきところで、なぜかグローバリゼーションというのです。要するに、宇野の時代と違う事実認識は、私個人のものではなく、このような新語の普及として現れる、いわば集团的認識 — 集合知というのでしょうか、いやちょっと違いますね — です。間違っているとしても、個人が勘違いしているというのではなく、社会的に間違った認識をしているのです。内容は間違っているかも知れませんが、社会的に大半の人が間違えるという意味では、間違える、それなりの理由があるわけです。この状況のもとでは、ある意味では間違えるほうが正しいので、少なくとも、この理由がわからず、自分のほうが正しい、というのでは、内容は正しくても、間違えるべくして間違えた人と五十歩百歩です。

■グローバリズムについて イデオロギー論のコアはここにあると思いますが、それはさておき、問題はグローバリズムという用語の背後に潜むイデオロギー的事実です。「何か」が変わった、従来の用語では足りない「何か」が起こっているのだ、という感覚を多くの人々が共有しながら、その漠然とした「何か」を一つの用語で語ろうとするわけですから混乱はやむを得ません。こうした社会的に湧きあがってくるイデオロギー性を帯びた用語に、一つの共通の定義を与えるのは無理なのですが、ただ、学問的に論じる場合には、世間一般に流布している多義的な用語法と区別して、基本的規定を自ら独自に定める必要があります。社会的認識にまかせ、多くの人がそういつているからといって、それをそのまま「いわゆる」式の括弧つき用法に多義的に包摂するのではなく、自己責任で一義化しなくてはなりません。自らの定義を明確にせず、目につく現象を記述した時事論説をただかき集めたのでは、学問的に明晰な認識から乖離するばかりです。20世紀初頭に、当時のマルクス経済学者は、グローバリズムとよく似たかたちで流布していたインペリアリズムというバズワードを巧みに学問の世界に引き入れたのですが、これと同じことがグローバリズムについても求められているのです。

■第一の立場 ということ、グローバリズムという用語の定義に進みます。これも話せば長くなりますが、もう何度も議論したことなので、ポイントと、そして私が頻繁にうけた「要するに世界資本主義だろう」という誤解について、補足しておきます。白黒ハッキリさせるなら、基本は大きくいて二つの立場に分かれます。現実には両方だという人は、ゲシュタルト心理学でよく引き合いにだされるルビンの壺を思いだしてみてください。描かれた絵と、認知された像とは次元が違います。個々の部分をこえる全体に関する像は、黒い横顔か白い壺か、いずれかになるのであり、同時に二つをみるとはできないのです。

この意味で一つの見方となるのは、グローバリズムをアメリカナイゼーションと捉える立場、もう一つは新たな資本主義諸国の勃興と捉える立場です。前者のアメリカナイゼーションは強力で、一般にこのようにうけとめる人が多いと思います。ソビエト崩壊後、アメリカの主導権が格段に強化され、この影響をうけて資本主義諸国が一斉にアメリカの新自由主義にならざるをえなくなったのだ、とみるのです。

■第二の立場 もう一つは、グローバリズムの底流を支えているのは、冷戦構造のもとで始動しそれを変質させていった第三世界における資本主義的發展だとみる立場です。この底流は、身近なところでいえば、韓国、そして台湾に見てとることができます。こうした

近隣諸国における戦後の発展をみるならば、資本主義経済はかなり早くにはじまっていたことがわかります。「開発独裁」という借り物のレッテルを貼り、これを資本主義の発生と切り離してしまうみかたがどこかで災いしていたのでしょうか、NICs や NIEs の発展に対して、新植民地主義や南北問題という枠組みで長らく論じられてきたのですが、私にはどこかしっくりこないところがありました。出発点をどこに求めるかは議論の分かれるところですが、いずれにせよ、グローバリズムという用語が登場した 1980 年代以前から、新興諸国の発展につながる動きは見いだすことができます。

私自身の立場は後者です。新興諸国の擡頭を資本主義の新たな生成と捉え、これが 20 世紀末における資本主義の大転換の原動力だとみなす立場です。もちろん、どちらも観察される現象についていえばいずれにも見えるわけですが、違いは見方にあります。この違いは、いろいろあるなかでどこに注目するか、何に関心があるか、といった立場によるのですが、自然に後者の立場にたつようになった私には、長年馴染んできた宇野の段階論が、このような見方をブロックする作用をもっていることに気づくようになりました。それは私が後者の立場を主張すると、宇野理論を支持する人たちから — 資本主義の発展＝崩壊という『資本論』の枠組みをでない人たちはもちろんですが — 似たような批判にくわしてきたからです。詳細はいろいろあるのですが、ここではもっとも印象的だったトピックを一つだけあげてみます。

**■世界資本主義論のグローバリゼーション** 私の狭い知識のなかでは、グローバリゼーションに関する第一の立場は、東大社研グループがその代表のようにみえました。アメリカナイゼーションと捉える立場からすれば、内なるネオリベリズムを外部に強要するのがグローバリズムということになり、両者は表裏一体のものとなります。これも詳細は省きますが、この第一の立場のさらに基礎にあるのはなにか、というと、それは中心国によって資本主義の発展段階を見なおしてゆこうという動向です。

この中心国史観には長い伝統がありますが、宇野を支持する人々のなかで、この受容には微妙な問題がありました。資本主義以前の段階でも、共同体と共同体の間に商品経済は存在してきたことを重視し、ただ労働力の商品化という歴史的契機でこの商品経済一般と資本主義を峻別する純粋資本主義論には、中心としての資本主義がその外部に広く商品経済社会を残すという、いわゆる基軸と周辺という考え方を誘発する一面があります。1960 年代に主張された古典的な世界資本主義論はこの側面を拡張したものでした。しかし、この世界資本主義論の弱点は、宇野が明確にしようとしていた自由主義段階から区別される独自の帝国主義段階が規定できないところにあります。少なくとも、純粋資本主義論の支持者からみると、純化傾向の逆転、没落期としての帝国主義段階が截然としないという難点をかかえていました。端的に世界資本主義論には段階論がないということになります。

逆に純粋資本主義論の帝国主義段階規定の特徴は、基軸国の消滅ということになります。ドイツを積極的典型とし、イギリスを消極的なタイプと位置づける帝国主義の「諸相」が基本となるのです。典型国はけっして中心国ではありません。それまで中心国であったイギリスが、その地位を失い、いわば多極化した点に資本主義の没落期の国際的指標を求めるものだったのです。

しかし、問題はこの先にあります。20世紀後半に入り、冷戦構造のもとで、アメリカが中心国の地位を固めてゆくと、宇野の帝国主義論の限界も露呈してきます。第一次世界大戦にいたる古典的帝国主義の時代を念頭に構成された『経済政策論』の発展段階論では、この現実が捉えられないわけです。このような限界を克服しようとするなかで、世界資本主義論の基軸・周辺論は、中心国の移動によって資本主義の発展段階を再構成する試みとして再版されたように私にはみえました。

■中心国史観によるグローバリズム論 アメリカナイゼーションをグローバリゼーションの核心と捉える立場は、この中心国史観によるものです。ドイツ＝後発資本主義国の資本主義化を、帝国主義段階のメルクマールとする純粋資本主義の段階論に対して、実証研究者のなかから、とくにアメリカ資本主義の研究者を中心に、歴史認識としての世界史的な覇権の移動によって、段階論を再構成しようとする動きが強められていったのですが、この延長線上にアメリカナイゼーション＝グローバリズム論はあるのです。

ただこの中心国史観の理論的基礎は脆弱です。それは歴史的事実を、外側から観察し「時代」を区分してきた歴史学の方法に近いものです。ひるがえって言うと、その是非は別として、マルクス経済学の段階論には、このような歴史学の時代区分と決定的に違う面があります。それは、資本主義に関する原理的な一般規定を基礎にした段階構成になっているのです。中心国史観は、発生した事実を後から整理する枠組みであり、マルクス経済学に移植するには、けっきょく世界資本主義論のような独自の理論を整理する必要があるわけです。その意味で、マルクス経済学者が中心国史観を取り入れようすると、世界資本主義的な資本主義像をその基底にすえるのが自然です。資本主義は基軸と周辺という二重構造を本質的に具えているという世界資本主義の資本主義像をベースにすることで、基軸の移動として発展段階を再構成する中心国アプローチははじめてマルクス経済学の段階論となりえたのです。

■純粋資本主義論の挫折 こうした整理がどのように進められたか、詳細は不明ですが、ともかく、ポスト冷戦後のグローバリズムの状況に対して、中心国的アプローチはグローバリズム＝アメリカナイゼーションというテーゼを提示したのです。この背景には、もう一つ、宇野自身を含め、宇野支持者の本流を形成してきた純粋資本主義論の挫折という事実があります。簡単にふれておきましょう。

すでに指摘したように、宇野弘蔵の段階論は、もともと第一次大戦にいたる古典的帝国主義の時代を対象に、資本主義の不純化から植民地争奪戦としての帝国主義戦争を位置づける内容になっています。しかし、宇野の帝国主義段階論のすがたが明らかにされたのは、基本的に第二次大戦後に、冷戦下で広く受け入れられていったのです。宇野弘蔵自身は、これを資本主義から社会主義への過渡期であると捉え、資本主義自身は戦後も帝国主義段階であることに変わりがないという捉え方をしていました。

これは「帝国主義」という用語を、大幅に拡充解釈することを求める。植民地をもたない帝国主義というのは、ある意味で語義矛盾です。ただ帝国主義段階の対象は基本的に国内に絞られ、その内容は不純化一般、すなわち非商品経済的要因の増進一般に抽象化され

たのです。「帝国主義」というラベルの問題をおけば、資本主義の発展段階としては 19 世紀末におけるドイツ資本主義に代表される後発資本主義の台頭以来、資本主義は国家への依存を強め、財政の膨脹、金融政策による介入、労働組合との協調など、さまざまなかたちで非商品経済的要因が果たす役割が増大しているという基調は変わっていないのであり、その意味で一貫した一つの「段階」だということができるわけです。

戦争直後に敷設されたこのレールのうえを、宇野支持者の本流は着実に進んでいったようにみえます。たとえば、農村からの弾力的な若年労働力供給という歴史的要因による高度成長、管理通貨制下のインフレーションによる実質賃金上昇抑制、生産性上昇と賃金上昇をリンクさせた労使協調型経営など、その内容は変えながら、資本主義の不純化という帝国主義の段階規定は、約半世紀にわたる日本資本主義の発展を説明する枠組みとして持ちこたえてきたのです。

■「没落期」の読み替え もっとも次の点は注意する必要があります。こうした非商品経済への依存は、資本主義経済の停滞をもたらすのではなく、逆に独自の発展の契機とされたことです。1970 年代初頭における高度成の終焉以降も、日本資本主義は 1980 年代末にいたるまで、先進資本主義諸国のなかで相対的にもかく好調な状態をキープしてきました。したがって、帝国主義段階を「没落期」と規定するには、さらなる読み替えが必要でした。政府に代表される非商品経済的な要因は停滞をもたらすというより、ほっておけばそうなるかもしれない停滞を回避する要因とされたのです。不純化＝停滞＝没落という等式に変わる何かが必要だったわけです。

私のみるところ、P.M. スウィージーの『独占資本主義』やガルブレスの『豊かな社会』など、アメリカ資本主義を対象とした研究に先例が多いのですが、宇野支持者がはじめに公式に着目したのは、レーニンの『帝国主義論』にでてくる「資本主義の不朽化」ではなかったかと思います。「不朽化」という概念は、はじめ浪費型社会のさまざまな負の側面を指摘するものでしたが、やがて、福祉国家型資本主義の延長線上に社会民主主義、クリッピング ソーシャリズムなど、徐々に脱資本主義を展望する色調を強めてゆきました。この意味で、資本主義の「延命装置」は同時に資本主義からの「離脱装置」でもあるというレトリックで、「没落期」は停滞型の没落論と異なる内容に読み替えられていったわけです。

しかし、1980 年代末のバブル崩壊以降、福祉国家型資本主義の枠組みは説得力を失ってゆきます。実証的な事実在即していえば、福祉国家論の支持者がいうように、1990 年代以降も大規模な財政支出に支えられた実態はほとんどなにも変わっていないのかもしれませんが、しかし、問題はイデオロギー的説得力にあります。停滞基調のもと、新自由主義的政策イデオロギーが強まるなかで、資本主義の歴史的発展段階という大枠を説明する力を失っていったのです。先に述べたように、発展段階論というのは、包括的な説明を可能にする見方であり、「全体」を統合する Gestalt ( shape ) です。部分部分がどこまで事実<sup>ゲシュタルト</sup>にフィットしているかに、全体像は優先するわけです。

この意味において、戦後一貫して宇野の支持者が歩んできた純粋資本主義論をベースとした、不純化＝帝国主義段階のルートは行き止まりに達したようにみえます。1990 年代

にはいと、純粋資本主義の発展段階論から覇権国の交替をメルクマールとする段階論への移行が目につくようになりました。帝国主義段階をドイツ中心ではなく、アメリカ中心に組み立てなおすべきだという議論は以前からあるにはったのですが、それがパックス・ブリタニカ、パックス・アメリカナという、伝統的な宇野理論ではついぞ耳にすることのなかった用語とともに全面におしだされるようになったのです。

■中心国説と単一起源説の同根性 少し回り道をして、グローバリズム＝アメリカナイゼーションという第一の立場の背景について考えてみたのですが、それはグローバリズム＝新興資本主義の群発とみる第二の立場との違いを、根本にさかのぼって理解する必要がありますと考えたからです。根本的違いとは何か、それは宇野の段階論構成の基底をなす資本主義観を是とするか非とするかの問題になります。帝国主義段階を資本主義の不純化と概括する純粋資本主義論は、中心国史観の理論的基礎である世界資本主義論 — こう明言する論者は少ないでしょうが — とたしかに鋭く対立してきましたが、それでも両者は根本にさかのぼれば同じ資本主義観を共有しています。そして、これがグローバリズムに対する第二の見方と対立するかたちになっているのです。

では、純粋資本主義論にも世界資本主義論にも共通する資本主義観とは何か。ひと言でいえば「単一性論」とでもいうべき資本主義観です。純粋資本主義論は、資本主義は重商主義段階のイギリスにおいて「生成」し、この地で商品経済的關係に純化し「発展」した後、それが外部に移植される過程で不純化し「没落期」にはいったという資本主義観になります。「発生」は一度かぎりだとみる単一起源説であり、この the capitalism が拡散してゆくという構成になっています。この時間軸に沿った発展を、90度回転して空間的に捉えると、単一の中心をもつ世界資本主義のすがたが現れてきます。両者は一見したところ鋭く対立するかにみえながら、単一的な資本主義観を共有しているのです。それは、原理論の中味をみてみれば、両者はおどろくほどよく似ていることからわかります。外部の非資本主義的な生産物を労働力商品に「内面化」した世界資本主義の原理論は、純粋資本主義による原理論以上に純粋な市場の原理で一元的に編成処理される資本主義像を描きだす結果になっています。違いは同じ原理像で現実をどう適用するか、対外関係を不純な要因として原理論の埒外におくのか、あるいは価格関係を通じて外部の社会も資本主義の内部に翻訳できると考えるか、の違いになります。

■アメリカナイゼーションの死角 純粋資本主義論は、この原理論の埒外の世界を認めることで、19世紀末にはじまった現在の先進資本主義諸国の発生を資本主義の「没落期」と位置づける、独自の段階論を構成してきました。ただこのような単位起源説には重大な盲点があります。それは、後発資本主義に独自の「発生期」を認めることを論理上困難にするという点です。逆にこの単一性にとらわれなければ、ドイツの帝国主義段階は、イギリスの重商主義段階と同じ位相に位置するものとして現れてきます。そしてイギリスの重商主義もまた、先行する先進資本主義であるオランダの支配をうちやぶるかたちで台頭した面が浮かびあがってきます。こうして、資本主義はそれぞれ独自の発生過程をもつのであり、イギリスにおける原始的蓄積が唯一の起源ではないという多重起源説的な捉え方も充



分可能なこともわかります。純粋資本主義論は、19世紀末における後発資本主義諸国の「発生」を隠蔽する副作用をもっていたのです。

以上のように考えると、世界資本主義あるいは中心国史観によるグローバリズム論も、同じように、今日の新興資本主義諸国に対して、その独自の「発生」を死角に追いやる効果をもつことがわかります。第三世界といわれた非資本主義諸国・地域の一部における資本主義の群発は、所詮は先進資本主義諸国の影響によるもので、その資本進出がなければ瓦解する脆弱で従属的な副産物とみなされることになるのです。アメリカナイゼーションによるグローバリズム論は、20世紀末に顕在化した新興資本主義諸国の群発を隠蔽する副作用をもっているのです。

このように整理してみると、グローバリズムに対する二つの見方の対立は、単に段階論の再構成にとどまるものではなく、その基底をなす資本主義の原理像にさかのぼって検討されなければならない問題を抱えていることがわかると思います。事実、第一の立場から第二の立場に対して加えられた批判は、それ自身、原理論の内容に関わるものでした。

第二の立場が、帝国主義段階からの切断を強調するのに対して、第一の立場は、グローバリズムを帝国主義段階の枠組みに収めることになります。そして、第一の立場から第二の立場に対しては、次のような質問がつけねに投げかけられることになります。すなわち、帝国主義段階とは異なるものとしてグローバリズムを位置づけるというなら、そこでの支配的資本は何か、基軸産業は何か、この二つの間に答えよというのです。これは原理論に深く関わる問題です。次にこの点を検討してみましょう。

## 2 「金融資本」支配説批判

■段階論の「公式」 段階論にとって原理論はどういう意味をもつのか、あらためて問いなおしてみると、独立した領域相互の全体関係とともに、原理論の特定の箇所がとくに段階規定に対応する部分関係があることに気づく。純粋資本主義論によれば、原理論は資本主義の純化傾向の、あくまで「延長」した先に、理論的に構成された純粋な資本主義像を対象とするものであり、その全体像がこれに接近しながらある時点で乖離してゆく歴史的発展段階を規定する「基準」となるわけです。したがって、前者の全体的関係が基本であり、原理論の部分を切り離して安易に理論を現実に適応すべきではないということになります。

しかし、こうしたいわば公式的見解とは別に、後者の部分的対応が事実上問題にされている箇所があります。それは、それぞれの段階には独自の支配的資本の形式が存在し、これが段階規定のメルクマールとなるという主張です。重商主義段階：商人資本、自由主義段階：産業資本、帝国主義段階：金融資本というのは、1960年代に「宇野理論」を普及するため、こしらえられた俗流「公式」です。

たとえば、グローバリズムに関して、これを「19世紀末に台頭し、20世紀を支配した帝国主義的プレートが、20世紀末にグローバリズムのプレートに交替する大きな地殻変動である」と規定すると、この「公式」をもとに、「もし帝国主義段階が終わり、別の段階

になったといたいのなら、金融資本に変わる支配的資本がなにか、明らかにせよ、それができないなら段階としては依然として帝国主義段階なのだ」という、形式的な反論に直面することになります。こうした議論をする人たちも、この「公式」ではどうも済まないと感じているのか、長い帝国主義段階をいくつかのサブステージに小分けにしたり、あるいはいくつもの類型を横並びにしたりすることで、「君のいたいことなら、これで片がつくはずだ」と撫順します。しかし、このサブステージ・アプローチは、外枠の「帝国主義段階」を形骸化し、原理なき「段階」を実質的に認めるものであり、歴史学の「時代区分」への後退であることに気づかないようです。

■「流通論」の独立化 たしかに宇野弘蔵の『経済原論』にも、段階論との関係を強く意識せざるをえない領域が存在します。その一つは「資本形式論」、もう一つは「それ自身に利子を生むものとしての資本」です。資本の基本概念を規定する領域では、資本主義の歴史的發展との間に何らかの関係が隠されているということになります。しかし、この「関係」はかなり複雑で屈折しています。

『資本論』はもともと資本主義の歴史的發展を解明する理論を根幹とするものでした。このことは、マルクスが生前に刊行しえた第1巻部分を独立させて読めば一目瞭然です。この巻の前半では、資本のもとに剰余価値が形成されることが説かれ、後半では — 私は資本主義的生産様式の本質を「協業」だとした第11章を分水嶺とみますが — この剰余価値の蓄積が産業予備軍の累積と資本の集中を生みだし、資本主義は生産力を上昇させながら、商品経済的に処理できない社会的なコンフリクトを極限まで高め、自己崩壊するという、明解な歴史的帰結が示されています。

すでに述べたように、『経済原論』は『資本論』からこの窮乏化法則と集中集積論による内部崩壊論を徹底的に駆逐し、資本主義の自立性 — 労働力商品化の無理を景気循環を通じて内的に解除できるというテーゼですが — の解明に焦点を転換する試みでした。ただこのような転換は、同時に『資本論』の「貨幣の資本への転化」に対する批判とセットになっていました。『資本論』では、資本家はいつでも必要なだけの労働力を商品として買うことができる「状況」が前提されています。したがって、商品、貨幣に続く資本ははじめから産業資本のすがたで登場します。これに対して『経済原論』では、この「状況」は商品の分析を基礎に貨幣を説明するような演繹的推論で導きだせない点が指摘されます。この点を強調するため、ここに理論展開の切断面をもうけ、資本論第1巻を「貨幣の資本への転換」のところで、第1篇「流通論」と第2篇「生産論」という篇別構成に改めたのです。

たしかに、「流通論」は資本主義以前の商品流通にも通じる市場の一般規定であり、これに対して「生産論」は労働力商品化を基礎にした資本による生産編成の原理を示すものだという『経済原論』の二分法は、『資本論』よりスッキリとみえるかもしれません。しかし、この切れ目に位置する「資本」の章に一步踏みこんでみると、両義的でそんなに簡単に理解できるものとはなっていません。ここから先は、原論特有の藪コキになるので、ここでは結論のみ述べておきます。

■資本形式論 まず、この「資本」の章自体は、① 姿態変換を通じて自己増殖する価値の運動体という意味で、資本なるものの一般的定式を与える面 — これは商品・貨幣と同じ理論的抽象レベルの議論です — と、②『資本論』にならって増殖根拠を問題にし、資本には商人資本的形式、金貸資本的形式、産業資本的形式の三形式があるという資本形式論で構成されています。商品・貨幣・資本と連続的に展開し、この資本の一般的定式がただちに産業資本になってしまう『資本論』に対して、①だけではなく、どうしても②の三形式論も言うておく必要があったのでしょう。宇野の論文をみると、この三形式論の展開は、商品・貨幣の展開とは違って、資本主義の成立の歴史を「指針」にして進める必要があること、商品経済があったからといって、それだけでただちに産業資本が発生するわけではない — ここから反対に資本の原始的蓄積が『資本論』第1巻の最後に、つまり理論展開の外部におかれた意義が高く評価されるのですが — こと、資本形式論は資本主義の成立過程に対して示唆を与えるといったことなどが繰り返し論じられています。

このように『経済原論』には、段階論の公式を唱える人たちが考えるように、とりわけ段階論と深く結びつけられた「部分」が存在するのはたしかです。しかし、その内容に一步踏みこめば、簡単にこれを通例の「公式」にできるものではないことがわかると思います。宇野を鵜呑みにすべきではない理由は、この後ふれますが、この資本形式論はもう一つ、段階論に強く関係する領域と連繫しています。

■「金貸資本的形式」のなぞ 公式の重商主義段階：商人資本、自由主義段階：産業資本の基礎が、『経済原論』の「資本形式論」を基礎とすることはすぐに察しがつくのですが、扱いがちょっと厄介なのは間に挟まった「金貸資本的形式」です。昔からこの形式を「資本」の一種だということに疑問をもつ人は少なくなかったようです。

というのも、「もうけ」 — 「利潤」というのは、一定期間の費用と収入というフローの差額を、はじめに投下したストックの額と比較するという、もう一段進んだ計算手続きを必要とするので「もうけ」とよんでおきますが、細かいことにこだわらなければ「利潤」のもとになる金額という意味で「利潤」といってもかまいません — は、「買って」「売る」という二つの価格の差です。貨幣を「貸す」という行為は、土地を貸すのと同じで、一定期間の利用権を「売る」行為です。だから、ただ「貸す」だけでは、どんなに高く貸しても差額（マージン）はでません。100 円の商品を 100 円で売れば、たしかに 100 円の貨幣収入は生じますが、100 円「もうかった」わけではありません。90 円で買って 100 円で売るから、はじめて 10 円の「もうけ」が計算できるのです。ちゃんと説明すれば中学生でもわかる、この「利潤」と「利子」の違いを無視して、貨幣を貸して利子をとる行為を資本の「形式」の一つだといってしまうのは、資本とは「要するにお金でお金をふやすことだ」といった中学生以下の通念俗説を難しい表現で糊塗するだけです。

事実、資本概念から「金貸資本的形式」を除去すべきだということは、だれでも — 少し原論的思考のトレーニングをうければ — わかるはずです。また、段階論の「公式」を支持する人たちにとっても、資本主義の生成・発展の過程で商人資本が果たしたような積極的役割を金貸資本も担ったとは考えないでしょう。原論研究者が「金貸資本的形式」を

除去するというのなら、ご自由にどうぞ、ということになるでしょう。

■「それ自身に利子を生むものとしての資本」ところが、「金貸資本的形式」にはもう一つの顔があります。それは、この金貸資本の貸付相手を、別の資本として限定することで浮かびあがってくる、資本に「寄生」する資本というメタ資本の概念です。こうすると「金貸資本的形式」は『経済原論』の最後に登場する「それ自身に利子を生むものとしての資本」を先取りして、資本の基礎的規定を与える資本形式論に位置づけたものだということになります。

もっとも、相手が別の資本であっても、貨幣貸付であれば本質は何も変わりません。メタ資本の関係になるのは、これが「貸付」ではなく、はじめから資本の「投下」すなわち「出資」だからです。したがって、この問題を考えたいのであれば、「金貸資本的形式」から切り離して、資本結合の可能性・必然性を資本の一般的な概念から厳密に推論すべきなのですが、これを「貸付」と重ねて考えようとすることから、原論の藪コキがはじまります。ここでもこれは省略して、結果のみ報告いたします。

問題は、株式会社形式の資本の処理にあります。『経済原論』では、この問題が「それ自身に利子を生むものとしての資本」という表題のもとで論じられています。「それ自身に利子を生むものとしての資本」というのは、『資本論』第3部第5篇のタイトルに含まれる「利子生み資本」zinstragende kapitalと同じです。このドイツ語は、マルクスの残した草稿では英語で monied capital と記されていたのを、エンゲルスが『資本論』を刊行するときにドイツ語になおした — monied capital は、銀行業における自己資本部分（銀行資本）に対して、貸出で形成された債権資産（これとバランスする銀行の負債）などを指す用語としてイギリスで流布していたそうですが — という経緯があります。

宇野弘蔵はこうした最近の研究などもより知る由もなく、この第5篇の「利子生み資本」に対しては否定的でした。『資本論』では「貨幣資本家」を「機能資本家」から分離し、前者が後者に貨幣を貸し付け利子を与える関係として、利子生み資本が規定されているが、利潤がえられるのに利子で満足するような「貨幣資本家」が前提されている、しかし、このような資本家の存在は、純粹資本主義の想定に反すると一蹴し、産業資本の間で一時的な遊休資金を融通する関係として商業信用・銀行信用を展開することで、利子率が産業資本の資本蓄積によって規制され、延いては利子率上昇を契機とする恐慌の必然性も原理論で説明できるという積極説にまとめたのです。

■理念の現実化 この処理は明解で正しいと思います。多くの宇野の支持者もこの路線にしたがって研究を進めたのですが、厄介なのは『経済原論』がこのあといった拒絶した「利子生み資本」を「それ自身に利子を生むものとしての資本」という名称で復活させた点です。両者はドイツ語なら同じになるはずなのですが、日本語で綴られた『経済原論』では違います。こちら辺から先は藪コキになるのですが、商業利潤に由来する利潤の利子と企業家利得（企業利潤）の分割が、産業資本も含むいわば資本観として一般化するのです。『資本論』のように貨幣を貸し付けて利子を得る関係が「利子生み資本」として「現象」する sich erscheinen（みなされる gelten）というのではなく、直接貸付関係が

なくても、もし貸せば利子を生みだす *tragen bear* はずだという考えるはずだ、これが資本の「理念」だということです。

この辺りはホントに藪が深くて宇野についてゆく人は希ですが、この藪を抜けて目指した先は見当がつきます。「それ自身に利子を生むものとしての資本」をあくまで資本家的な観念、資本の理念とすることで、逆に、純粋な資本主義では「理念」でしかないものが、現実の存在となった。そうだとすれば、これは現実が純粋な資本主義から乖離した証となる、という逆転、不純化のロジックです。これもちょっと超論理的なところがあり、たとえば「理念」でしかない、見方によっては不要な回路で、普通のロジックなら「説明できない」ですますところですが、それを、あえて「理念」としては「説明できる」と肯定形にネジるので難しくなるのです。宇野の文章を長年読んでくるとわかる、こうした細かい話はもうどうでもよいでしょう。

問題は「現実の存在」の中味です。即物的 *sachlich* にいつてしまえば、それは証券市場で株式証券を売買する大衆投資家の登場です。株式証券は支配証券でもあるのですが、もっぱら利潤証券として — それでも利潤証券であって利子証券ではないのですが — 配当を利子とみなし、利子率を利回りとして擬制資本が形成される状況が現実のものとなったということです。

「金貸資本的形式」を説き「利子生み資本」否定し「それ自身に利子を生むものとしての資本」で締めくくる屈折した展開は、そのまま理解しようとするのが難しいのですが、「それ自身に利子を生むものとしての資本」という「理念」までは原理論の内部で説明できても、要点は株式資本の実際は説明できない、こので「きない」という否定形にあります。

■余集合としての「金融資本」 ここで段階論の公式にもどってみます。この第3項に登場する「金融資本」は、「産業資本」や「商人資本」が曲がりなりにも — というのは「(的)形式」が付加されたかたちで — 『経済原論』に登録されているのに対して、いっさいそこには顔をださない存在です。それは『経済原論』では説明できない株式会社を基礎とした資本というかたちで、かろうじて否定形でつながっているにすぎません。

金融資本という用語自体は、フィルファードィングが書名に掲げて以来、マルクス経済学のなかに広く浸透したのですが、『金融資本論』 *Das Finanzkapital* 1910 は株式会社を基礎に、銀行資本と産業資本が癒着した独占的資本という独自の定義を与えています。ただ、この用は、19世紀末のドイツの状況を反映したフィルファードィングの定義をこえて、この時期、後発資本主義国にそれぞれ独自の型をもって登場した巨大独占資本を概括する用語に拡張されてゆきます。日本においても、『資本論』の翻訳がでるとのほぼ軌を一にして『金融資本論』も翻訳され — 『資本論』とほぼ同時に『金融資本論』や『帝国主義論』が併行して読まれた事情は、日本のマルクス経済学の独自の性格を形づくったものとして注意する必要があります —、その時代の特徴を反映し、研究者の関心に応じて、多義的にもちいられてゆくようになりました。

宇野弘蔵の場合には、さらにこの多義性を増強させる事情がありました。「それ自身に利子を生むものとしての資本」の観点から、理論上は資本の「理念」としてしか説明できないものが実在化したとして捉えられた株式資本は、要するに大衆株主の視点からみた株

式資本なのです。ところが、金融資本のコアは、こうした株主を取り込みながら、産業を組織化し独占体を形成して超過利潤を追求する反対の極にあります。それこそ利子で満足するのではなく、企業利得を追求する資本が、金融資本の本体なのです。「それ自身に利子を生むものとしての資本」から「金貸資本的形式」へと『経済原論』のなかに否定形ではあれ、根を下ろしている「株式資本」は、段階論の地上に現れた時点で、金融資本の積極規定としてそのまま育ってゆけぬものだったのです。

■さらなる余白 こうした限界をかかえているため、宇野の没後、宇野を支持する原論研究者の間では、現実の株式資本を、「それ自身に利子を生むものとしての資本」とは「生きぬ仲」にあるものとして論じる、この屈折したアプローチを見なおし、信用論の延長線上にストレートに説明する方法が一般的になっています。利潤率均等化の邪魔をするわけではないから、長期資金の運用における銀行信用の限界を補足する機構として、株式資本を位置づけることができるという、いささか腰のひけた説明になっていますが、理論構成としてはずっとスッキリしています。

ただ、このように株式資本を原理論の内部に回収することは、段階論における金融資本との最後の仲を断ち切るものになります。この点は充分注意する必要があります。株式資本も原理的に説明できるということは、帝国主義段階を特徴づける金融資本の現象は、株式会社一般から派生するものではないと宣言することになるからです。金融資本は、原理論から解放され、よりいっそう自由な余白を与えられたのです。ただ急いでつけ加えておきますが、私は、金融資本が原理論から遠のくことに反対し、金融資本も原理論のなかに取り込め、原理論でなにかも定義すべきだ、といっているわけではありません。ただ、原理論では説けないという余集合型の「金融資本」をもちだして、すべてを「帝国主義段階」に封じ込めてしまう思考方法は見なおすべきだといっているのです。

帝国主義段階は金融資本が支配的資本となった時代だという宇野支持者の常套句は、こうした二重の屈折を許してしまう金融資本の多義性のうえに成り立っています。「金融資本」という用語は、いわば巨大なブラックボックスで、さまざまな現象が盛り込めるようになっています。柔軟といえば柔軟なのですが、それはけっしてメリットにはなりません。たしかに原理論から段階論を分離することには大きなメリットがありますが、同時に負の効果もともなうのです。この点に対する反省の欠如が、20世紀末の資本主義の地殻変動を捉えようとしたとき、大きな障害となって現れました。支配的資本という通念を批判しないかぎり、万年帝国主義段階のドグマから逃れることはできません。あとに残るのは、多様に多様なサブステージ論、永遠の過渡期論だけです。

### 3 「商人資本」支配説批判

■二種類の「商人資本」 ちょっとトーンが高くなってしまいましたが、もう少しだけ、支配的資本説の難点を原理論の側から論じておきます。ポイントは、重商主義段階：商人資本、自由主義段階：産業資本という「公式」の前半もまた、資本主義の「起源」に関するドグマを含んでおり、それが20世紀末の地殻変動を掩蔽する原因になっているという

点です。

この原因の一端は、資本の三形式論にさかのぼることができます。重商主義段階では商人資本が支配的であったという場合の商人資本（『経済政策論』の第1章第1節における資本）は、『経済原論』の「商人資本（的）形式」とは大きく異なります。重商主義段階で支配的だとされているのは、イングランドの羊毛工業における問屋制家内工業を基礎とした資本です。たしかに賃金労働者を直接雇用し、自己の作業場で生産を管理しているわけではない、という意味では、19世紀における綿工業を支配した資本とは違います。しかし、たとえば対外貿易に従事した大商人のように、生産を組織することなく、地域間における商品の価格差に増殖根拠を求める資本に比していえば、「産業資本的形式」に近い性格をもっています。

たしかに『経済政策論』の第1章第3節で重商主義の経済政策として列記されているものの大半は、外国貿易に従事する大商人の利害を反映するものです。しかし、同書の第1章第2節で資本主義の生成期を支配した資本として描かれているのは、こうした本来の商人資本ではなく、問屋制家内工業を組織する別種の資本です。この別種の資本は、イングランドに特有なものではなく、羊毛工業では先進的だったイタリアからフランドル地域にかけて、さまざまなバリエーションはあったでしょうが、広くみられたものです。おそらく原料の羊毛が現地に近いところで生産されることから、その加工過程を担う家内工業が発達しやすい環境があり、資本がこれを外部から組織する様式が一般化したのではないかと思います。イギリス羊毛工業は、この共通の系列に属するおそらく最後の成熟した様式でしょう。これに対して、原料である棉花を海外から輸入し、その加工からはじめざるをえない綿工業を支配する資本と異なるのは、ある意味で当然のことです。

■羊毛工業の断絶性 同じ繊維産業であるため、羊毛工業から綿工業へ連続的に発展していったように考えられますが、生産の組織化についてみると、むしろ大きく断絶しているようにみえます。在来の羊毛工業が死滅してゆく、すぐその隣にで、新たな生産システムと経営様式の綿工業が芽を吹いた、とみるほうがずっと自然です。「産業革命」という用語は『資本論』第1部13章「機械と大工業」で頻出します — その後経済史家が重視するようになったこの用語を、本格的につかっただのはマルクスではないかと思います — とくに手作業の機械化（作業機の改善）は綿工業に集中しています。羊毛工業で先行した機械化が綿工業の発展を促したのではなく、逆に綿工業の機械的生産方法が羊毛工業に移植されたのです。

断絶性は労働力の面からみても明らかです。綿工業の基盤となった単純労働型の大量の賃金労働者は羊毛工業の基盤をなす小生産者の没落によって生みだされたものではありません。これによる供給がゼロだとはいませんが、基本は農村における無産労働者化によるものです。『資本論』第1部の第24章「いわゆる資本の原始的蓄積について」を読んでみてすぐに気づくのは、羊毛工業の話がまったくでてこないことです。宇野弘蔵が資本主義の根本をなすといった労働力の商品化、マルクスのいう「近代プロレタリアートの創出」は、農業における土地と労働力の分離の過程が基本経路です。極端に言えば — 歴史家ではないので、過去の事実を理屈だけで説明させてもらえば — 羊毛工業が存在しなく

ても綿工業は発展できたこととなります。

■家内制と工場制 羊毛工業は、第12章「分業とマニュファクチュア」のテーマであり、ここでは、同じ手工的熟練という技術的基盤を共有しながら、「協業にもとづく分業」—分業ではなく協業が独立小生産者との違いです—という「生産様式」—「経営様式」とよぶのが適切ですが—によって集団力を活用するマニュファクチュアによって、独立生産者が駆逐される過程が描かれています。そして、マニュファクチュアも、何よりもまず、規模の面で独立小生産者に対して圧倒的に優位な競争力を獲得するとして、家内工業 domestic system 対 工場制度 factory system の関係で「資本主義的生産様式」の確立とみるわけです。工場制という点で、マニュファクチュアは機械制大工業と同格なのです。

宇野の段階論はこれに対して、マニュファクチュアの存在は部分的例外だったと批判して、羊毛工業では問屋制家内工業が支配的だったと主張しました。歴史的事実としてまず検証すべき問題でしょうが、『経済政策論』の第1章第2節は、このような『資本論』の羊毛工業に関する記述にはほとんどまったくふれず、この著作が書かれたころのイギリス経済史家の2,3冊の著作によって問屋制度の実態が紹介されています。歴史的事実としていずれが正しいのか、私には判断できませんが、宇野弘蔵のいう重商主義段階は、—問屋制家内工業+問屋(=商人資本)→工場生産+産業資本という「発展」で資本主義の「生成」を考えてると解釈すれば—『資本論』における資本主義的生産様式の起源をいわば完全に反故にする内容になっていること自体は銘記すべきです。

■単一起源説 歴史的な事実は調べればいろいろな面がでてくるので、簡単に白黒ハッキリさせるのは無理でしょうが、理論はいわばゲシュタルト的認識によるもので、白なら壺のかたち、黒なら横顔というように判別してみせるのがその役割です。図柄をきめるのは次の白黒の2色です。

一つは(白)連続説、もう一つは(黒)断絶説です。主語をわざと省いたのですが、何かが続いている、断絶しているというのが第一の契機です。(白)の主語 X は、問屋制家内工業を支配する商人資本、羊毛工業、(黒)の主語 Y は機械制大工業を基礎とする産業資本、綿工業など、いくつかの集合の要素が考えられます。

ここで、宇野弘蔵の重商主義段階は(白)だ、というもまた、宇野はそんなことはいっていない、という人たちと、泥沼の解釈合戦になりそうなのでやめておきますが、真偽を批判すべき問題は、資本主義の起源について、どういう図柄なら合理的に描くことができるか、です。連続説でみると、羊毛工業から綿工業への発展を通じて、イングランドではじめて資本主義は発生した、という単一起源説になります。連続説が単一説だというのは、逆にきこえるかもしれませんが、イングランドのなかですべて完結していたという意味で単一起源説になるのです。単一起源説をたてる方法はもう一つあります。問屋制資本を「あれは産業資本ではない」と切り捨てて、綿工業で単一起源説をたてる方法です。櫻井毅先生は、羊毛工業はもちろんですが、ブレナー・マクナイや A. ウッドの農業資本主義論 agrarian capitalism を評価しながら、これも最後の最後のところで「それも資本主義ではない」と切り捨てて、機械制大工業・単一起源説を堅持されています。これはちょっと



変則で、連続説にたつて、イギリスで世界ではじめて資本主義ははじまった、と主張するのが単一起源説の正則でしょう。

■多重起源説 反対に、単一起源説を見なおそうとすると、(黒)の断絶説が有力な手がかりになります。微妙な点ですが、単一資本主義の正則でも、(白)の主語 X に資本主義の生成、発生期の資本主義という属性を認めるのですから、これを受け入れたとします。すると(黒)の断絶説からは、X は Y とは違う資本主義だ、という命題がでできます。つまり、①異なる種類の資本主義があり、しかも断続説ですから、②別々に発生した、という結論になります。

単一起源説の人からは、すぐにそれではウェーバーの賤民資本主義と同じで、資本主義は古代からあった、という話になってしまう、資本主義を資本賃労働を基礎としたマルクスの近代資本主義として厳密に規定すれば、X と Y という二つの資本主義がある、などということにはならない、という反論ができそうです。ところが実は、発生期の資本主義という範疇を認める段階論の着想は、異なるタイプの資本主義の存在は容認しているのです。ただ、X → Y の連続性で、資本主義は単一だ、という命題を維持しているわけです。

面倒な論理学はさておき、断絶説に立つと、19 世紀の資本主義 Y は独自の起源をもつということになり、これに先行する資本主義 X は別の起源をもつということになります。歴史的事実にそって地理的な契機をつけ加えれば、羊毛工業ベースの資本主義は大陸に起源をもち、イングランドにおいて成熟したのに対して、これを押しつけるかたちで、綿工業ベースの新型の資本主義が誕生した、という絵柄が浮かびあがってきます。資本主義の多重起源説です。

この旧式であれ資本主義とよぶことに、なお強い抵抗感を覚える人もな多いと思いますので、もう一度いいます。そこには『資本論』にいうプロレタリアートはいません、小生産者の世界です。ここだけみると、やはり資本主義ではないではないか、ということになるのですが、反対の極をみれば、営利目的で小生産者を組織している資本は存在しているのです。資本なしに独立小生産者が、商品流通一般を形づくっているわけではありません。東の空を指して夜明けだという人に対して、西の空を指していや夜だ、という人がいるすがたを思い浮かべれば、少しは抵抗感が薄れるでしょうか。

単一起源説に対する多重起源説というのは、人類の起源に関して学生時代に聴いた講義を思いだしてつけたものです。新人はアフリカに起源をもちこれが世界に広がったという説と、世界各地の異なる原人からそれぞれ独立に進化したという多起源説があるという話を聴いた覚えがあります。資本主義に関して、単一起源説とは違う図柄が現れたとき、自然にこの話を思い浮かべて、この図柄を多起源説とよんだのですが、ただ少し注意が必要です。人類学の多起源説は多地域起源説です。バラバラに発生し独自に進化したという空間性の強い概念です。しかし、資本主義 X と資本主義 Y の関係は、先行して X が発生し、次にその支配を突き破るかたちで Y が擡頭する、ある時期、同じ地域で重なって拮抗する関係だという意味で、単なる多起源説ではなく多重起源説という呼び方をしてみたのです。

■プレートの交替 ここで話をもとに戻します。前半で話したグローバリズムに対する第2の立場、グローバリズムの底流＝第三世界における新たな資本主義の勃興 という立場で、あらためて宇野弘蔵の発展段階論をみなおしてみると、これは資本主義の起源をどう捉えるか、という基本問題に立ち戻る必要があると私は考えるようになりました。イギリスにおける資本主義は、あくまで一つのタイプの資本主義の起源であり、唯一の起源ではない、そこでは外来の資本主義が衰退するなかで、新たな資本主義が生みだされていったのだ、と多重起源説で考えれば、このグローバリズムの底流説もうまく説明できます。

さらに、段階論を構成する発端となった、19世紀末のドイツの資本主義化も、イギリス型の資本主義の不連続な起源とよく似たかたちのものであったことがわかります。イギリスの重商主義段階はドイツの帝国主義段階に相似のかたちで重なります。イギリスの羊毛工業と綿工業の不連続性は、— 極端な単純化ですが印象を強くするためにいえば — ドイツの綿工業と鉄鋼業の関係にシフトするのです。イギリス綿工業が断絶的な起源をもつとすれば、ドイツ鉄鋼業もイギリスから移植された綿工業と断絶的な起源をもつとこととなります。長い20世紀をドイツの資本主義化だけで片づけるわけにはゆきませんが、間を省いていえば、20世紀末のグローバリズムも別のかたちの資本主義の起源をとして位置づけることができることとなります。

このような多重起源説的な資本主義の発展段階のフレームワークは、単一起源説を基礎とする資本主義の生成・発展・没落の「段階」という表現で語るには無理があります。起源の多重性を明確にするには、上層の地殻を下層のマントルが動かしてゆくというイメージで、たとえばプレートの交替に見立てたらどうかと考えたこともありますが、この種の比喩的表現は好みがあるので、こだわりのつもりはありません。問題は中味で、「段階」という枠組みにこだわると、帝国主義段階と不連続なグローバリズムを唱えるなら、第4段階のメルクマールをいえ、というドグマをぶつけられます。これさえ回避できれば、障碍はクリアできます。だいたい以上が、段階論の構成を見なおそうという、今回の話の半分です。もう半分あるのですが、時間の制限があるので、それは最後にリマークだけして、別の機会に回します。

## 結語

いま段階論を再構成する必要がなぜあるのか、この問題にはだいたい答えることができました。まだ細かい点では言い残したことがあります。たとえば、「商業資本」と「金融資本」については検討してみました。「産業資本」も原理論の立場からみると決定的な難点があります。一言でいえば、段階論の「公式」でいう「産業資本」は、実は個人資本家のことです。産業資本がつねに個人経営になる必然性はないのですが、「金融資本」と並置されるときは個人資本家が想定されています。これも根が深い問題で、資本主義にとって個人資本家が本来の資本なのか、資本の一般概念から必ず個人資本家になるということが導きだされるのか、という難問でしょう。

しかし、それは、既存の三段階型の段階論を、多重起源説で再構成するとすると、とり

わけグローバリズムをどう特徴づけるのか、積極的な中味の説明に比べれば細かな話です。現在通説的な段階論の基準には、すでにみた①中心国史観と②支配的資本の「公式」のほかに、③基軸産業論があります。羊毛工業、綿工業については、支配的資本説を検討するなかで少し論じてみましたが、帝国主義段階の基軸産業についてはふれることができませんでした。

③の「基軸産業」も、実は①の中心国史観と同様、歴史学の時代区分型の外からの観察による区別で、おなじ限界をかかえています。ただ、グローバリズムも含めて、資本主義的發展を理論的に捉えるうえでは不可欠な視点を提供します。ただそれには、「基軸産業」という sachlich な捉え方を棄却して、労働・生産・技術そして情報に対する原理論の開発が前提になります。グローバリズムのもとで擡頭しつつある新たな資本主義のベースに、インターネットを代表とする情報通信技術の発達があるのはおそらくたしかでしょう。しかし、そもそも労働と生産の区別さえ、原理的に解明できていない状態では、生産組織と通信技術のような進んだレイアの問題に厳密な考察を加えることはできません。②の資本に関しては、価値論のような抽象度の高い理論が準備されていますが、労働と生産にはじまる領域については残念ながら「理論」とよべるようなものは存在していません。③の現象追記的な基軸産業説を支持するつもりはありませんが、その難点に批判を加えることで、労働・生産の組織化の観点から、グローバリズムの積極的内容について話すつもりでしたが、これは次回に回したいと思います。